

春日閑話

黒田清輝

二月初旬のある日の午後、麻布弁町の別邸に、黒田先生を訪ふ。昨年末から今春へ掛けて、絶對安靜にせられたので、御容態は非常に良好であると云ふ、取次の人の話を聞いて安心して、病室である南向きの、中二階に案内される、次の間に未だ白衣の看護婦が詰めて居るのは、さすがに病室らしい氣分を與へる。先生は東の小窓を頭にして、二尺もある様な布團の上に、仰向きになつて、可成り重量のある、王建章の扇面帖を見ておられたが私が入ると、靜かに本を下して、其上から、殆ど平常通りのつや／＼しい顔を出され、半身を起して座布團を進められるのであつた。如月初めとは云ひながら、今日邊りは四月頃のように、温い日が障子一ぱいにさして、床の間の牡丹もこぼれる様に、枕元の鉢植の梅は、丁度満開である。靜かな午後、話はなかく／＼につきない。

○

今年鉢植ながら、梅の花を染々眺めましたよ、二三年來は殊に、梅から櫻の時分に掛けて議會で忙しいものだから、いつも花を見ずじまひでしてね、この窓の外にも老梅があるのだが一向見ない内にいつも散つて了つてる。ことしは梅をゆつくり見たいと思つてゐますよ。

日本畫とちがひ洋畫では、梅の花はどうも面白くなくてね、……私は確か一度位しか描かない……又櫻にした所で、東京の白つぼいのはどうも餘り感心しない、京都邊りの色のよいのが、遠山か何かに、ぼつと見えるのはよいものだがね。どうも洋畫には面白くないかんやうに思ふ。

○ 雑誌の方で段々お忙しからう、二三の新聞や雑誌にも出た様だが——確か内田魯庵君邊りも書いて居た様だが——震災に依つて破壊せられたり焼失して了つた美術品を、一つ正確に調査して記録しておくと思ふ事は、美術史上必要な事と思ふが、あの當時はいろく誤傳もあつた様で焼けたと思つたものが、残つてゐたり大丈夫と傳へられたものが、亡くなつてゐたりしてゐると思ふが、もう世間も静まつたから、一つ調査して貰ひ度いものだと思ふ。

○ それから震火災の時、美術品を危険を犯して取り出したり、保護したりした。隠れた人々の功勞を調査して、大に賞揚したいね。何んでも「彦根屏風」をひどく苦勞して取り出したのを誰れかゞつまらぬ事だなどと云つてゐたのを、見た様に思ふが、美術を保護すると云ふ上からは今度の様な時に、盡力した人を調べて、其功績を永く記録して置きたいと思ふ。

○ 復興の事等も漸次、緒に就いて居ると云ふ事だが。美術上、又文化上の特別の記念建造物……例へば聖堂やニコライも其内に入るかも知れぬが……湯島の聖堂の様な大切な、特殊のものはどうなつてゐるか、そろく復興にかけてゐるか。なに未だやつてゐない。それは遺憾だね。あの建築は我國の建築史上は勿論文化史上、非常に重大な意義のあるものだから、先づ第一に復興する必要^{ツマ}がある。確かあれば、正確なプランがある筈であるから、愈々復興となれば、最も手早く出来る筈である。少し雑誌上でも眞面目に論議して、促進しなければいかん

と思ふ。

何れにしても大分、身體の具合もよいから、其内に床上げをして、諸君と一夕歡談をして、大に斯界の爲めに盡さねばならぬ。いろ／＼美術界にも、しておかねばならぬ事が多いよ。又問題も多々ある。

梅の花が咲いて終つた頃は、多分床上げをして、諸君と久潤振りで話さう。

『国民美術』一三 大正二年三月

隈元謙次郎「黒田清輝後期の業績と作品下」(『美術研究』一三三 昭和十八年二月)によれば、黒田は大正二二年七月末に麴町平河町の邸宅より麻布弁町の別邸に移り、そこで九月一日の関東大震災に遭う。以後はその別邸に住むようになったが二月二日、宮内省に出勤中狭心症を發し、臥床するに至つた。翌二三年四月には小康を得るものの、六月に喘息を併發して再び病状が悪化し、七月二五日不帰の客となつた。黒田の絶筆とされるのが本談話のしばらくのちに描かれたと思われる《梅林》であることは、話の内容と照らして興味深い。

なお罹災美術品についての所感は、『国民美術』の前身である『美術月報』(四一―大正二年二月)掲載の「災後雑話」(『絵画の将来』所収)でも述べられている。



《梅林》東京国立博物館蔵